

〔書評と紹介〕

北海道・東北史研究会編

『北からの日本史』第2集

若 松 正 志

一

本書は、一九八八年七月に開催された弘前シンポジウムの講演・研究発表を中心にとめられた北方史研究の論文集である。いわゆる北方史の研究は、一九八六年夏の函館シンポジウムによって大きな成果をあげ、ここ数年の日本史研究のなかで最も深化された分野であるといっても過言ではない。本書はその第二弾にあたるわけである。以下、本書の内容を紹介し、いくつか気づいた点を述べることによって、私なりに、北方史研究の現状と課題について考えてみたいと思う。

二

それでは、三部からなる本書の内容を、掲載順に見ていくことにする。第一部は、本シンポジウム全体の問題提起である長谷川成一氏の報告と榎森進氏の講演をもとにした二論文からなる。

①長谷川成一「シンポジウム開催に至る経過と日本北方史研究に関する若干の考察」は、函館シンポジウムの反省をふまえ、本シンポジウム

の論点として、a「しよっぱい川」（津軽海峡）をはさんだ地域について、「ひと・もの・情報」という観点をふくめ交流の実態を多角的に見ていくこと、bアイヌ民族など異民族問題の検討を通して、単一民族国家論を克服すること、c「北に住む人々の視座」を重視した地域史像を再構築すること、この三つを設定したこと、また方法として、考古学・民俗学など学際的な視角を取り入れたことを述べている。そして近年の研究動向については、古代・中世に比して近世の北方史研究が十分ではないことを指摘している。

②榎森進「海峡をはさむ地域史像」は、「ひと・もの・情報」の観点を重視し、中世・近世の北方地域の交流全般について、考古学・文献史学・民俗学などの最新の成果をふまえてまとめた論文である。具体的には、日本との交易関係によって生じた擦文文化のオホーツク文化に対する優位性、中国（元）とサハリン・アイヌとの軍事的対立・支配関係、蝦夷地支配方式に見る中世的な織田政権と近世的な豊臣政権の差、奥羽からの出稼や米・魚の動きを通してみた幕藩体制下の蝦夷地と本州とのつながりの深さなどを述べている。

第二部は、シンポジウムでの五つの研究発表と、それらについて新たに執筆されたコメントが収められている。

③菊池俊彦「カムチャツカ半島出土の寛永通宝」は、ロシア側の資料（探險記など）や、寛永通宝・内耳土器・回転式鋳頭といった出土遺物の考古学的検討から、北千島に広がるアイヌ文化を見たものである。表題の寛永通宝については、和人との交易で（討論では、貨幣としてではなく、装飾品として、交換手段となつたと補足）アイヌの手に渡り、ア

アイヌがカムチャツカ半島へ来ることによって、この地にもたらされたことを推定している。北方文化を総合的に考えている氏によってなされた、アイヌの広域的な活動を示す、興味深い事例報告と言えるであろう。

④児島恭子「カムチャツカの『アイヌ』をめぐる問題」は、③菊池論文へのコメント。カムチャツカ地域に関する研究史、この地域の特質、言語学的な観点からのコメントを述べ、菊池氏の研究と深く関わる、ギリヤーク民族とカムチャダールの接点として、オホーツク文化を考察する重要性を指摘している。

⑤入間田宣夫「中世奥北の自己認識」は、秋田安東氏の系譜に見える「日本將軍」などの表現は、北方の王者という意識の産物か、日本側の北方認識の産物かという点を、安東氏の系図をたどるなかから考えたものである。そこに見られる、鬼王安日伝説、「悪事の高丸」伝説、安部頼良・貞任らの伝説、日本將軍伝説を検討した結果、中世の京都や鎌倉の意識が、語り物の流布によって奥北へ伝わり、それが形を変え、中央志向をもつ安東氏の自己認識となっていたことを明らかにした。伝説・伝承を歴史学の素材とする技はみごとである。

⑥浅倉有子「蝦夷認識の形成」は、寛文の蝦夷蜂起（シャクシャインの乱）における北奥羽諸藩の動向を、特にその情報収集活動を詳細に追うことによって、この時期の松前藩・北奥羽諸藩の協力関係や対抗意識、幕藩領主層の北方認識を明らかにし、またその後の蝦夷認識の広がりや、「北狄の押え」としての北奥羽大名の自己認識の確立を見ている。

⑦鶴田啓「寛文『蝦夷蜂起』と近世的『蝦夷』認識の形成」は、浅倉論文へのコメント。浅倉氏に対しては、先行研究への見解や蝦夷認識形

成の段階規定の明確化がほしかったとし、また氏自身の関心から、蝦夷地図や用語としての蝦夷についての検討の必要性を指摘している。

⑧渡辺信「南羽と蝦夷地」は、米のできない松前・蝦夷地への米の移入を素材に、松前・蝦夷地、北奥、南羽の関係を見たものである。商場知行制段階では、松前藩主は羽州幕領米に、給人は津軽領など北奥地域からの米に依存していたため、北奥地域の元禄飢饉によって、羽州幕領米が松前氏の家臣団統制・蝦夷地支配のうえで大きな意味をもったこと、そのため場所請負制や蝦夷地の全国的な流通構造への編成が進んでも、青森の港としての地位は上がらなかったこと、文政期以降は領地替などの問題から、羽州でも庄内地域から村山地域に主たる供給地が変わること、そして羽州両地域の農村・米流通の状況について述べている。

⑨田島佳也「松前藩にとつての羽州幕領米・羽州幕領地」は、⑧渡辺論文へのコメント。渡辺論文に対して、松前・蝦夷地への米供給地としての羽州幕領地の設置の意味（設置後の編成についても含むものと思われる）の追究や、納屋米について検討する必要性を指摘している。

⑩佐々木利和「犬は先祖なりや」は、アイヌの犬祖説話を題材に、日本人とアイヌとの関係を考察した。すなわち、本来は大神と高貴な女性の結婚によってアイヌが生まれてきたという説話のモチーフが、シャモ（和人）によって記録されるようになった江戸時代以降、牡犬と日本人女性の結婚によって潤色され、アイヌはシャモの血をひきながらも動物の血も受けるという点でシャモより劣るという屈折した和夷同祖論となり、シャモに従えばシャモに近くなれるといったシャモによるアイヌ支配の正当化の論理や、シャモのアイヌへの差別意識の形成など政治的

に悪用されたことを明らかにした。氏の問題意識を反映した、現代のアイヌ問題にまでつながる、貴重な成果である。

⑩蓮池悦子「アイヌの『犬・狼祖神話』とユーカラ」は、⑩佐々木論文へのコメント。ユーカラ研究者の立場から、犬祖神話の分布の状況、説話の「読みかえ」の具体例について述べ、アイヌ神話の新しい「読みかえ」と犬の蔑視の理由を考える必要性を提起している。

第三部は、シンポジウム後、新たに執筆された七本の論稿からなる。

⑫佐々木潤之介「他からの目と内の芽と」は、天明飢饉後の奥羽を素材に、そこを旅した古川古松軒・菅江真澄の認識、農業と村の発展に努力した秋田の長崎七左衛門、鉱山の経験などから国家のありかたを考え、た佐藤信淵らを通して、近世中後期という時代の断面を描いている。

⑬菊池徹夫「アイヌ史と擦文文化」は、近世アイヌ文化の基層・原型は擦文文化であるとされる研究状況に対して、オホーツク文化との関連性にも目を向けるべきだとする。すなわち、アイヌ文化の代表的な要素である、クマに関する儀礼や住居の形態、墓制、狩猟具キテ・ユーカラ・振り玉などは、オホーツク文化と共通する部分が多いということである。氏は、昨年夏の「上ノ国シンポジウム」の報告では、さらに事例を増やし、自説を補強したが、海保嶺夫氏の議論（「日の本蝦夷」・「唐子蝦夷」・「渡党蝦夷」）との関連についても、コメントが欲しかった。

⑭熊田亮介「北の民・北の領域」は、「狄」などのエミシの呼称や行動、地域行政区分から、東西に広大な国土をもつという認識の律令国家が、津軽・渡島・北海道といった地域をふくめ北方を意識していたこと、律令国家はエミシ問題を国内問題（異国との問題ではない）として扱っ

たこと、エミシの存在も律令国家の対応も地域によって多様であったことを述べ、またそこでの交流や影響を考察する必要性を指摘している。

⑮大石直正「関東御免津軽船」は、この船が北条氏所領から年貢などを運ぶことで関税免除の特権を受けていたがその実は商売船であったこと、北条氏の年貢処理などに見られる時衆の海運への関わり、「津軽船」という名称は「筑紫船」と同様のもので畿内とつながる小浜・若狭と津軽との活発な船の往来があったことなどを推定し、荘園制的経済構造をふまえた、スケールの大きい中世日本海海運の姿を描いている。

⑯浪川健治「近世北日本社会論の一視点」は、津軽・南部領内に「狄村」という形で居住させられていた本州アイヌの活動について、「寛文蝦夷蜂起」で「津軽藩御抱之夷」として表れるシウラキがこれ以前松前近辺で「うとふ」捕獲を行なっていることや、日本海交易を通じて南羽や北陸まで商行為に出向く本州アイヌもいることなどから、従来考えられてきた以上に彼らには広い交流圏があり、和人と文化接触も見られたことを推定している。

⑰伊藤裕満「下北半島民とアイヌの文化接触」は、下北地方に残る北海道アイヌ製作の「象徴的文様」のアットウシ（アイヌ伝統の衣服をと）りあげ、樺太・留萌・雄冬という範囲の共通の文様をもつ「文化圏」の存在をまず指摘し、続いてこれが下北地方からその地域に出稼ぎに行き上層漁夫として働いた人たちがその権威のシンボルとしてアイヌ人に作らせたものであることを想定している。「民俗文化比較論」が十分發揮されていると言えよう。

⑱中川裕「『ことば』が語るアイヌ人と和人の交流史」は、「ウンマ」

(馬を表すアイヌ語の北海道太平洋岸諸方言) という語から、歴史的变化を背景とした日本語の流入の地域的・時間的差異が読み取れるなどの事例をあげながら、アイヌ人と日本人との交流史を考えていく際の、言語学的方法の有効性を指摘している。

そして最後に、シンポジウムの討論要旨がある。個々の報告に対する質疑応答・全体討論を通じて、報告の補足や問題点が指摘されるとともに、このシンポジウムの意味についてまで言及がなされている。ただ、構成上では第二部の最後にあつたほうがよかつたのではないかと思う。

三

以上、本書の構成・内容について、紹介してきた。長谷川氏の課題設定に対し、個々の論文がそれぞれに取り組み、北方史研究を前進させていることは明らかになったと思うが、函館シンポジウムを中心にとめられた『北からの日本史』(三省堂、一九八八年。以下、前集とする)とも比較しつつ、今少し本書の特長を見ておきたい。

まず、本書が、一般の文献史学の成果にとどまらず、考古学・民俗学・言語学など学際的な視角をとりいれている点を、高く評価したい。社会史ブームにより、歴史学にもこのような手法が取り入れられつつあるのは歴史学界全体の動向でもあるが、北方史の場合は文献史料を残さないというアイヌの歴史を扱うという特殊性から、このような方法がよりいっそう重要であると言える。方法論の異なる領域に入り、それぞれの手法を学び、成果を共有し、共同研究として一書をなす、言葉では簡単だ

が、大変な作業である。『ひと・もの・情報』の交流』というテーマは、この点も意識してつけられたのではないかと思うのは、いささか考えすぎであらうか。

次に、本書でなされている技術的な工夫について、二点指摘しておきたい。そのひとつは、本書には、多数の写真・絵・図が入れられている点である(前集では地図が一枚だけ)。これは、考古学・民俗学の成果を取り入れたためであるが、このことは内容の理解に大きく役立っていると言えよう。もうひとつは、本書では、シンポジウムの研究発表に関するコメントが入れられている点である。前集にも報告に関連する短い文章はあるが、本書のように、直接当日の発表に言及するというものばかりではなかった。シンポジウムに参加された方は特によく分かると思うが、研究報告の量に比べて討論の時間は短い。この現状を考えれば、こういう形でコメントがつけられることの意味は小さくないと言えよう。

四

続いて、北方史研究における今後の課題となりそうな点を、いくつかあげておきたい。

そのひとつは、北方地域における前近代と近代の連続面と断絶面を考えていく作業の必要性である。最近の北方史研究が、北海道開拓史観の克服からスタートしたことからすれば、前集・本書が前近代の歴史像を浮かび上がらせることに重点を置いたことは理解できる。しかし、前近代の北方地域が明らかになってきた現在、北海道開拓史観がどう変わる

のかという点を考える時期に来ているのではなからうか（上ノ国シンポジウム）では、田中秀和氏が、明治国家による北方地域の編成について研究発表を行なった）。

二点目は、近世の対外関係で言われる「四つの口」論での「松前口」と他の口（「長崎口」・「対馬口」・「薩摩口」）との共通点と相違点を検討する必要性である。前集・本書のなかで、この点を扱った研究は、残念ながら見られない。北に視点を置いたため、こうなるのは必然ではあるが、これまで「長崎口」を主として研究してきた筆者には、やはり不満に思えるのである。たとえば、外国人の江戸参府についてみると、寛永期にオランダ・琉球・朝鮮は問題となるが、アイヌはどうか、松前口への幕府の対応は必ずしも明らかとは言えないのではないか。東アジア全体・幕藩制国家の対外関係全般の視野からも考察を重ね、北方地域の特質をさらに明らかにしていく必要がある。近年、紙屋敦之氏・鶴田啓氏ら、これまで「薩摩口」・「対馬口」をそれぞれ主として研究してきた方々が、蝦夷地関係の論文を発表された点は、この点きつとよい刺激となり、そのような議論が展開されることを期待させる。筆者自身も、「長崎口」とも関連させ、今後北方の問題を考えていきたいと思う。

五

最後になるが、本シンポジウムは、研究者のみならず、学校の先生・その他多くの一般市民の方々の参加を得ている。このような交流を、さらに広げていくためにも、多くの方に本書をお読みいただくことをおす

すめして、筆をおくことにする。

（三省堂、一九九〇年七月刊、四六版、三五五頁、定価二八〇〇円）

（東北大学文学部助手）